学校適応に及ぼす親子イメージと愛着スタイルの影響

初等教育教員養成課程　教育科学選修　心理学履修モデル
舟橋　真緒

問題と目的

愛着とはBowlby（1969）が提唱した概念であり，その個体がネガティブな心的状況におかれた際に，他の個体に接近･接触するなどして心的安定を回復しようとする行動制御システムのことである（遠藤, 2005）。愛着は，最初は主に母子関係の中で発達し，成長とともに母親以外の人物との間でも築かれる。Bowlby（1973）はまた，内的作業モデル（IWM : Internal Working Model）という概念を提唱している。IWMは，他者は自分の要求に対してどのように応じてくれる存在なのかといった他者に関する作業モデルと，自分は他者からどの程度受け入れられている存在なのかといった自己に関する作業モデルの2要素からなる，他者と自己の有効性の主観的な確信のことである（松下・岡林，2009）。

従来の愛着研究において，IWMの状況はAinsworth，Blehar，Waters & Wall（1978）によるavoidant，secure，ambivalent の 3 領域から捉えられることが多かった。しかしその一方で中尾・加藤（2004）はBowlby（1973）の理論に基づき，IWM の性質の違いを 4 つの愛着スタイルに分類している。この分類方法は，Ainsworth et al.（1978）と比較すると，secureが安定型，ambivalentがとらわれ型，avoidantが愛着軽視型および恐れ型に相当する。このように，従来avoidantとして同等に扱われていたものを，愛着軽視型と恐れ型の2種類に分けるところに，4カテゴリー・モデルの最も大きな特徴があるといえる。

これまでの研究から，幼少期の親子関係がIWMの形成に影響し，形成されたIWMが社会的適応や学校適応との関連をもつことが明らかになっている。ところが先行研究には，IWMの状況を4類型のパターン別に捉え，母子関係イメージとの関連，学校適応感との関連を検討したものはない。さらに，父子関係と愛着形成に関する研究は，母子関係に関するものほど多く行われていない。そこで本研究では，IWMの状況の違い（愛着スタイル）を4類型に分類することによりIWMの状況を広く具体的に捉え，幼少期の母親および父親との関わりが愛着形成に与える影響について検討するとともに，高校生の学校適応感に与える影響について検討することを目的とする。

方法

調査対象者　愛知県下の大学に在籍する大学生262名（男性125名，女性137名）

調査時期　2014年9～10月

調査内容　**(1)幼少期の母子関係イメージを測る質問紙**；酒井（2001）の幼少期の母子関係イメージ尺度を使用。「安定母子関係因子」「拒否的な母子関係因子」「アンビバレントな母子関係因子」の3因子16項目。**(2)幼少期の父子関係イメージを測る質問紙**；酒井（2001）の幼少期の母子関係イメージ尺度を使用。(1)と同様の構成であり，「母親」を「父親」に置き換えた。**(3)夫婦関係満足度を測る質問紙**；諸井（1997）の夫婦関係評価尺度を使用。1因子6項目。**(4)青年期の愛着スタイルを測る質問紙**；中尾・加藤（2004）の一般他者版ECR尺度を使用。「見捨てられ不安」「親密性回避」の2因子36項目。**(5)学校環境適応感を測る質問紙**；内藤・浅川・高瀬・古川・小泉（1986）の高校生用学校環境適応感尺度を使用。「規則態度」「教師関係」「友人関係」「クラブ態度」「H.R.活動」の5因子20項目。上記の質問紙は全て「かなり当てはまる（5)」,「やや当てはまる（4)」,「どちらともいえない（3)」,「あまり当てはまらない（2)」,「全く当てはまらない（1)」の5件法で評定を求めた。

手続き　講義の開始前もしくは終了後，集団法にて実施。その場で回答してもらい，回収を行った。

結果と考察

各質問紙の構造化　幼少期の母子関係イメージについて，主因子法，プロマックス回転による因子分析を行い，「安定的母子関係イメージ」「依存的母子関係イメージ」の 2 因子が採択された。次に，幼少期の父子関係イメージについて同様の因子分析を行った。「安定的父子関係イメージ」「依存的父子関係イメージ」の 2 因子が採択された。続いて，夫婦関係満足度について同様の因子分析を行った。「夫婦関係満足度」の単一因子が採択された。また，青年期の愛着スタイルについて同様の因子分析を行った。「見捨てられ不安」「親密性希求」の 2 因子が採択された。さらに，学校環境適応感について同様の因子分析を行った。「規則態度」「教師関係」「授業外活動」「友人関係」の 4 因子が採択された。

青年期の愛着スタイルの分類　青年期の愛着スタイルについて，因子分析の結果抽出された 2 因子（見捨てられ不安・親密性希求）の各因子の項目合計得点を算出した。その後，それぞれの得点を平均値によって高群・低群に分類した（見捨てられ不安；平均値＝高群 2.65 点以上，低群 2.65 点未満：親密性希求；平均値＝高群 3.06 点以上，低群 3.06 点未満）。この得点をもとに，愛着スタイルを 4 類型に分類した。

青年期の愛着スタイルと親子関係，学校環境適応感との関連　幼少期の母子関係イメージ，幼少期の父子関係イメージ，夫婦関係満足度，学校環境適応感の下位尺度得点を従属変数，愛着スタイル 4 類型を独立変数とする一要因分散分析を行った。その結果，安定的母子関係イメージ，依存的母子関係イメージ，安定的父子関係イメージ，依存的父子関係イメージ，教師関係，授業外活動，友人関係について，群間に有意差が示された。また，夫婦関係満足度について，群間に有意差（傾向）が示された。そこで Tukey の HSD 法による多重比較を行った。安定的母子関係イメージにおいて，安定型は愛着軽視型，恐れ型よりも有意に得点が高いことから，安定した母子関係の中で育った者ほど，他者に対する IWM がポジティブになりやすいと考えられる。続いて，安定的父子関係イメージにおいて，安定型はとらわれ型，恐れ型よりも，有意に高いことから，安定した父子関係の中で育った者ほど，自己に対する IWM がポジティブになりやすいことが伺える。本研究の結果から，母親と父親が子どもの養育に果たす役割の違いの存在が推測される。次に，依存的母子関係イメージおよび依存的父子関係イメージにおいて，とらわれ型は愛着軽視型よりも有意に高かった。とらわれ型は愛着軽視型とは正反対のタイプであり，養育者に過度に依存心を抱いて育った者ほど，他者に対する IWM がポジティブになる一方で自己に対する IWM がネガティブになりやすいことが伺える。なお，本研究における依存的母子関係イメージの項目内容は，酒井（2001）において主に「アンビバレントな母子関係」に分類されるものである。とらわれ型は「アンビバレント」な愛着パターンに相当することから，幼少期のアンビバレントな愛着が，成長後の青年期においても継続していると考えられる。次に，夫婦関係満足度については，安定型は恐れ型よりも高い傾向が見られる。夫婦関係が良好な家庭の中で育った者ほど，自己および他者に対する IWM がポジティブになることが伺える。また，学校環境適応感については，教師関係，授業外活動，友人関係の各側面で安定型ととらわれ型の適応が良好であることが示されたが，規則態度については群間に有意差が見られなかった。本研究の調査対象者の約 8 割が教員養成系大学の学生であったことが，愛着スタイルによる差が見られなかったことと関連しているかもしれない。さらに，不安定型であるとらわれ型も他のタイプより学校環境適応感の各得点が高くなったことから，学校という社会的な場・集団においては，自己に対する IWM の高低に関わらず，他者に対する IWM がポジティブである者の方が適応しやすいことが考えられる。安定型の愛着スタイルをもつ者は，自分に自信を持っており，他者が自分の期待に応えてくれると考えているため，学校環境の中でも対人関係や行事参加において積極的な姿勢を見せていると考えられる。一方，とらわれ型の愛着スタイルをもつ者は，自分に自信が持てない代わりに他者と結びつくことによって安心感を得ようとすることから，自身の言動を他者と一致させようと努めた

結果として，学校環境適応感が高くなるのではないだろうか。

家族システムが学校環境適応感に及ぼす影響　幼少期の母子関係イメージ，幼少期の父子関係イメージ，夫婦関係満足度の下位尺度得点をZ得点へ標準化し，クラスタ分析（Ward法，平方ユークリッド距離）を行った。その結果，デンドログラムから4つの解釈可能なクラスタが得られた。学校環境適応感の各因子得点を従属変数，クラスタを独立変数とする一要因分散分析を行ったところ，規則態度，教師関係，授業外活動，友人関係について群間に有意差が示された。そこでTukeyのHSD法による多重比較を行った。学校環境適応感の全ての因子において「家族としてのまとまり」が「機能不全」より有意（もしくは有意傾向）に高いことが示された。このことから，母親および父親それぞれとの安定したコミュニケーションや，夫婦同士の情緒的結びつきの強さが，子どもの学校適応に正の影響を与えることが示された。また，教師関係では「父母それぞれと正の関係」は「機能不全」より有意傾向で高いことが示された。夫婦関係が良好でなくても，両親と安定したコミュニケーションをとることができている子どもは，教師とも積極的に関わろうとすると考えられる。

性別，愛着スタイルに基づく学校環境適応感との関係　学校環境適応感の4つの下位尺度得点を従属変数，性別と愛着スタイルを独立変数とする2要因の分散分析を行った。友人関係において，性別と愛着スタイルの交互作用効果が有意傾向となった。単純主効果の検定の結果，とらわれ型の愛着スタイルにおいて性別の単純主効果が有意であり，男性は女性よりも友人関係得点が高くなることが分かった。これに関して，青年期の友人関係において女性よりも男性の方が友人との行動を重要視するという指摘（榎本，1999）がある。とらわれ型は愛着スタイル4類型の中で最も対人関係に固執しやすいタイプであるため，指摘されるような傾向が顕著に現れたのではないだろうか。さらに髙坂（2010）は高校生女子の友人関係が消極的・防衛的な関係であると述べている。高校生女子は自分が所属する「グループ」の中での対人関係を重視し，それ以外の他者との関係についてそれほど注意を払っていないことが考えられる。

まとめと今後の課題

本研究の目的は，青年の愛着スタイルを4類型に分類し，幼少期の母親および父親との関係イメージが愛着スタイルに与える影響について検討すること，また，愛着スタイルと親子関係イメージが学校適応感に与える影響について検討することであった。

親子関係イメージと愛着スタイルとの関連を検討した結果，母親と父親では，子どもの愛着スタイル形成に与える影響に違いが見られた。母子関係が安定的であるほど子どもの他者観がポジティブになりやすく，父子関係が安定的であるほど，子どもの自己観がポジティブになりやすいことが明らかになった。一方で幼少期の母親もしくは父親との関わり方がアンビバレントな様相を示す子どもは，青年期において自己観がネガティブになる可能性が示され，母親と父親が共通して子どもに与える影響についても明らかになった。さらに家族システムと学校環境適応感との関連について検討したところ，両親と安定したコミュニケーションをとり，両親同士の情緒的結びつきが強い子どもは，学校環境における適応が良好であることが明らかになった。これらのことから，安定した夫婦関係や親子間の適切なコミュニケーションが子どもの社会的適応に重要な影響を与えることが推察される。

ところで，依存的母子関係イメージ，依存的父子関係イメージが高い者は自己についてのIWMがネガティブになることが明らかになった一方で，依存的母子関係イメージ，依存的父子関係イメージの両得点が最も高い「家族としてのまとまり」群の学校適応が最も良好であるという結果が出た。養育者への依存がどの程度であればIWMや学校適応にプラスの影響を与えるかについては本研究からは明らかにできなかったた

め，今後検討していく必要があると考える。加えて，本研究では母子関係，父子関係について検討したが両親と子どもの三者関係については検討していない。家族システムと子どもの適応との関連を見るにあたり，この三者関係の視点も重要となるであろう。

また，愛着スタイル別に学校環境適応感との関連を検討した結果，従来の研究と同様に，安定型の愛着スタイルをもつ者の適応が全般的に良好であるという結果が得られた。しかし規則態度についてのみ，群間に有意な差が見られなかった。本研究の結果からはその要因を断定できないため，更なる検討が必要だろう。加えて本研究では，不安定なタイプとされているとらわれ型も，他の不安定型に比べ適応が良好であることが明らかになり，他者に対する IWM がポジティブなほど，学校環境への適応が良好であることが示唆された。さらに，とらわれ型の男性はとらわれ型の女性よりも友人関係得点が高いことが明らかになった。同じタイプでありながら性差が見られた理由を本研究では明らかにできなかったため，今後の検討課題としたい。

本研究では幼少期の両親の養育態度（親子関係イメージ）を測定するために，青年本人による回想に基づいた質問紙を使用した。しかし，本研究において回想された養育態度と実際の両親の養育態度にはズレがあることも考えられるため，両親により回想された養育態度を用いた評価も必要となるだろう。また今回は先行研究に倣い，愛着スタイルを便宜的に 4 類型に分けて分析および検討を行ったが，同じタイプに分類された者の中でも，愛着の様相に多少の違いがあることも十分に考えられる。クラスタ分析などを用いて実際の愛着スタイルの様相を把握し，社会的適応との関連を検討していく必要があるだろう。

引用文献

Ainsworth.M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S.(1978).*Patterns of attachment: A psychological study of strange situation.* Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Bowlby, J.(1969).*Attachment and loss.* Vol.1. *Attachment.* New York: Basic Books.（黒田実郎ほか訳　1976　母子関係の理論 1　愛着行動　岩崎学術出版社）

Bowlby, J.(1973).*Attachment and loss.* Vol.2. *Separation: Anxiety and anger.* New York: Basic Books.（黒田実郎ほか訳　1977　母子関係の理論 2　分離不安　岩崎学術出版社）

遠藤利彦（2005）．アタッチメント理論の基本的枠組みの研究　数井みゆき・遠藤利彦（編者）　アタッチメント――生涯にわたる絆――　ミネルヴァ書房

榎本淳子（1999）．青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化　教育心理学研究，**47**，180-190.

髙坂康雅（2010）．青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向――青年期における変化と友人関係満足度との関連――　教育心理学研究，**58**，338-347.

松下姫歌・岡林睦美（2009）．青年期における愛着スタイルと母子イメージとの関連――質問紙と母子画を用いての検討――　広島大学心理学研究，**9**，191-206.

諸井克英（1997）. 子どもの眼からみた家庭内労働の分担の衡平性――女子青年の場合――　家族心理学研究, **11**, 69-81.

内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三（1986）．高校生用学校環境適応感尺度作成の試み　兵庫教育大学研究紀要．第 1 分冊，学校教育・幼児教育・障害児教育，**7**，135-146.

中尾達馬・加藤和生（2004）. “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討　九州大学心理学研究，**5**，19-27.

酒井厚（2001）．青年期の愛着関係と就学前の母子関係――内的作業モデル尺度作成の試み――　性格心理学研究，**9**，59-70.